資料４

未来を見据えて里潟の復活を目指す

衰退した佐潟のハス復活を目指した取り組みを発表する報告会が 2 月 12 日、赤塚公民館で開催されました。主催はコミュニティ佐潟、佐潟と歩む赤塚の会。約 40 人が参加しました**＝写真上＝**。

冒頭のあいさつでコミュニティ佐潟の高島圭介会長は「保全活動のボランティアに携わる人たちを引き続き支援したい」と話しました。

基調講演では県水鳥湖沼ネットワーク事務局長の佐藤安男さんがビデオ出演。「ハクチョウと新潟」と題して講演。佐藤さんは「2022 年までの 10 年間平均で日本に約 4 万羽、そのうち新潟県に約 42%の約 1 万 7 千羽が飛来し日本一である」と指摘しました。

続いて久原泰雅さん（歩む会、県立植物園）は「佐潟は微妙なラインにいる。水位管理の変更などでハスが１個体、２個体でも定着すれば大きな変化が期待できる。未来を見据えて里潟の復活を目指したい」と述べました。

次に赤塚小学校５年生の児童が総合学習**＝写真下＝**の成果を発表、佐潟の良さを知ってもらうために作った歌「佐潟と共に」を披露しました。

最後に歩む会と１年半に渡ってともに活動してきた新潟大学創生学部の池田麻里子さんが佐潟の保全活動を持続可能にするためには何が必要なのか。地元の２つの小学校の児童へのアンケート結果をもとに報告しました。池田さんは「ハスプロジェクトの体験が子どもたちの意識を変えており、非常にうれしいことだ」と報告しました。

赤塚小学校の出前授業に取り組んできた久原泰雅さんは、「今年もまた佐潟下潟でのハス復活を報告できなかったのは残念でしたが、水位管理を再開できたこと、赤塚小の児童たちが植栽したレンコンを収穫できたことは一つの成果として報告できる。来年はさらに良い報告ができるよう、様々なことに挑戦していければと思います」と話しました。

前年に比べて開花時期は早く、個体数も多く確認できた。
（2022 年 7 月 5 日、観察舎隣りハス田）

2023 年 3 月 16 日
佐潟と歩む赤塚の会